PROJECT

知の実践の「かたち」を問う学史へ

文
重信幸彦

共同研究 ● 日本におけるネイティブ人類学/民俗学の成立と文化運動：1930年代から1960年代まで（2010-2012）

文化運動から

日本の民俗学の歴史は、往々にして、柳田國男と1935（昭和10）年に結成された「民間伝承の会」を中心に、全国の「郷土研究」のローカルな実践が組織化され、それが現在の民俗学の礎となった、という物語として語られる。

しかし、民俗学のように、もともとアカデミックな制度の外側で成立した学の歴史を語ることは、容易ではない。主だった大学の研究室の歴史や、研究者の列伝、構築された概念や学説の展開を叙述すれば済むわけでもなく、どのような視点で語るかが、重要な課題となる。本共同研究は、従来の歴史語りを相対化しつつ、アカデミックな制度を整える以前の日本のネイティブ人類学（民俗学＋初期民族学）が、昭和初期戦前期から、大政翼賛会が「地方文化」振興をかかげた戦中期をへて、戦後1960年代にかけて、各地に展開した多様な文化運動と関わりながら存在していたことに着目する。

ここでは文化運動を、郷土研究と呼ばれた歴史や考古学、そして短詩系文学から小説にわたる文学、博物学、さらには演劇など、在野の人びとが自発的な同人組織を中心に具体化していた実践と位置づけ、口碑、伝承、慣習の「発見」を通して自らの生活を自省的に捉え返すという民俗学的想像力の成立を、こうした多様な文化運動の広がりと重なりのなかで捉え直すことを目的としている。

また特に、初期の民族学者たち（岡正雄、杉浦健一、関敬吾など）が、戦時下の1942（昭和17）年に開設された民族研究所などを通して本格的海外調査を開始する以前に、柳田國男の実践などを媒介に、各地の文化運動と少なからず接点を持っていたことにも注目したいと考えている。その意味で本共同研究における「日本のネイティブ人類学」は、互いに不可分なものとして存在していた民俗学と初期民族学を含意している。

学史の語りかた

この10年ほどの間に、民俗学の展開を、ローカルな実践の側から問い直す研究が蓄積されている。たとえば、小国（2001）は、地方の学校教育の現場を焦点化し、昭和初期から戦中、戦後において、教師たちが運動としての民俗学にどのように関わったかを検証している。そして、昭和初期の小学校教師たちの実践が、柳田國男と「民間伝承の会」に関わりながらも、一方で生活綴り方運動や地方主義文学運動など、民俗学以外の運動をも媒介にして具体化されていることを明らかにした。そうした実践の横断性は、今日のアカデミックな民俗学を自明とし、そこから歴史を語ろうとする視点からは見えにくい。

また伊藤（2004）は、信州の郷土研究の実践が、柳田國男との深い関わりのなかで具体化し、柳田自身もそのなかで自らの学の輪郭を構築していったことを検討する一方で、「比較」という方法を通して「郷土」を超えた「一国民俗学」を志向し始める柳田と、「郷土の人びとの生活の実態と過去の人生をあるがままに見たい」という信州の郷土研究者の志向との間に、深刻な葛藤が生じていたことを明らかにしている。

中心としての柳田國男にローカルな実践が統合され、今日の民俗学がある、という歴史語りは、単純すぎるのである。

ローカルな運動を前景化する

本共同研究に関わる先行プロジェクトの一つ、国立歴史民俗博物館共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」（代表者:小池淳一、期間:2004–2006年度）は、学史を問うわれわれの視点を、民俗学という既存の枠組みに閉じ込めずに、「民俗」へのまなざしそのものの生成を問うことで、ローカルな実践を掘り起こし、雑誌メディア等のネットワーク形成の機能に着目し、その広がりを見渡す必要性を提起した（小池 2009）。

もう一つの関連プロジェクト、科学研究費補助金・基盤研究（B）「戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究：社会における学問実践の形」（代表者：森明子、期間：2007–2009年度）は、ドイツの民俗学が、ナチスのイデオロギーを下支えしてきたゲルマニスティークの下位領域としての過去を相対化し、1960年代末以降、社会科学を志向した新たな学（経験文化学・ヨーロッパ民族学）へと変貌した過程を検討するとともに、日本の民俗学の展開と比較する枠組みの構築を目指した。1963年にアカデミックな制度として全国組織化したドイツの民俗学は、それ以前は、地方（ラント・州）ごとの郷土研究者の会の集合体として存在していた。この地方の郷土研究の歴史は今日も続いている。現在各地の大学の民俗学研究所が地域ごとの特色を色濃く残していることは、こうした伝統と深く関わっている。

このドイツの状況は、1935年以降、柳田を中心に全国組織化されたと語られる日本の民俗学と対照的に見える。しかしそこからわれわれは、学の展開を語るための視点についてヒントを得ることもできる。あえて、ローカルな文化運動の広がりを前景化し、そこに柳田國男などの実践を位置づけ、従来の中央対地方という二項対立的発想がもたらす単線的歴史観を相対化していくことができるはずである。

「方法」の学史へ

昭和初期に北九州・小倉で活動していた小倉郷土会は、柳田國男と「民間伝承の会」と深い関わりを持っていたが、その実践のありようを見ると、民俗学は、文学（短詩型文学、小説）、歴史、考古学などとともに、あくまでも彼らの実践の選択肢の一つにすぎず、郷土会に参加している者たちの動きは、他のジャンルの文化運動と重層していた（重信 2009）。さらに同会は、同人誌の発行やイベントの企画などを通じて、他地域の文化運動と密接に連携していたのである。こうした実践にとって、柳田國男や「民間伝承の会」は統合の中心というより、他地域における運動とのつながりや専門知への媒介の選

小倉郷土会の機関誌『豊前』創刊号（1935年9月）の書影。小倉郷土会は、耳鼻科開業医・曽田共助が自宅書斎を開放したサロンのような場に集った人びとにより構成されていた。『麦と兵隊』で知られる作家・火野葦平も、そこに集った一人であったという。彼らは、しばしば郷土研究だけでなく現代詩や俳句、短歌、児童文化運動などの同人組織にも関わり、その実践は領域横断的で重層的であった。

飛騨高山で、作家・江馬修（なかし）を中心に結成された飛騨考古土俗学会の機関誌『ひだびと』書影。同会がこの誌名で発行し始めた一冊目（1935年1月）。同誌は、地元で現代詩などの文芸活動の中心にいた福田夕咲（ゆうさく）や、歌人・画家でもあった富田稔彦（としひこ）らが「土俗」に関する記事を寄せるだけでなく、柳田國男をはじめ、栗山一夫（赤松啓介）、宮本常一など、各地で実践を展開していた人びとも寄稿し、飛騨を越えた場として機能していた。

択肢の一つとして位置づけるほうが、よりリアルなのである。

そして、その柳田國男という媒介を通して、民族学者・杉浦健一が小倉郷土会に立ち寄り、同会の同人が杉浦と近郊を巡検し座談会を開き、柳田の都市論の重要性について後の学史を先取りした示唆をうけるなど、ささやかながら意義深い接点を持つことにもなる。本共同研究ではこうした各地の文化運動の展開を、比較検討することになる。

運動における「つながり」と重層性、ジャンルの横断性などを捉えるためには、学説史や概念の展開のみに焦点化するのではなく、いかに学を実践しようとしたのか、その方法に着目する必要がある。佐藤（2009）は、運動がどのような仕組みにより認識を生みだし、それを共有しようとしたのか、「認識の生産過程の総体」、すなわち方法を問う学史を提起している。それは、何を成し遂げたかより、どのように実践しようとしたか、その未発の可能性まで射程に収めた学史を志向しうるだろう。

ローカルな実践がどのように調べごとを具体化したか、どのように史資料を共有しようとしたか、地誌の編纂や講座・講演会の実施などイベントをどのように具体化したか、同人誌など雑誌メディアをどのように機能させていたか、それらによりどのような「つながり」が具体化されえたか、本研究では運動の理念や語られた言説だけでなく、共有された史資料、雑誌、場といった運動の方法を規定した物質的な「かたち」のありようの検討を重視する。

言い換えれば、人は、多様な実践の重なりのなかで、どのようにして民俗学に関わるようになったのか、その現場を明らかにすることにほかならない。

それは、在野の学がアカデミックな制度を整えていくという進化論的学史ではなく、場や関係性を創出し、ジャンルの重層性・横断性をもたらす、実践の方法としての「ネイティブ人類学」のダイナミズムを問う学史になるはずである。本共同研究の若いメンバーの一人は、われわれにとって「元気の出る学史を構想したい」と野心を述べた。われわれは決して明るくはない学の状況を意識化し、未来へと投企しうる歴史を必要としているのである。

【参考文献】

伊藤純郎 2004『柳田国男と信州地方史──「白足袋史学」と「わらじ史学」』刀水書房。
小池淳一編 2009『民俗学的想像力』せりか書房。
小国喜弘2001『民俗学運動と学校教育──民俗の発見とその国民化』東京大学出版会。
佐藤健二 2009「方法としての民俗学/運動としての民俗学/構想力としての民俗学」小池淳一編『民俗学的想像力』pp.260-281せりか書房。
重信幸彦 2009「『野』の学のかたち──昭和初期・小倉郷土会の実践から」小池淳一編『民俗学的想像力』pp.134-158 せりか書房。
森明子 2009「ドイツの民俗学と文化人類学」『国立民族学博物館研究報告』33(3):397-420。

しげのぶ ゆきひこ

北九州市立大学基盤教育センター教授。専門は民俗学、近代都市の生活文化史/誌研究。著書に『タクシー/モダン東京民俗誌』(日本エディタースクール出版部 1999年)、『〈お話〉と家庭の近代』(久山社 2003年)、共著書に『たったひとりのメディアが走った 「タクシージャーナル」三十三年の奮闘記』(現代書館 2004年)など。